

吉備国際大学研究紀要
 (医療・自然科学系)
 第28号, 1-8, 2018

「在宅で介護する男性介護者のアイデンティティ」の概念分析

木村 麻紀・谷垣 静子*

Concept Analysis of Male Caregivers' Identity

Maki KIMURA, Shizuko TANIGAKI*

Abstract

The purpose of this study was to elucidate a definition of identity through concept analysis for male caregivers who provide home care. By referring to Rodger's method, a concept analysis was conducted using 10 articles. The results of the analysis extracted the following four categories as attributes: "managing both care and housework," "managing both care and work," "accepting full responsibility for care," and "maintaining a good balance between care and private life." The analysis also extracted one category for the antecedent condition "there was nobody else but me who could provide care" and two categories for the consequences "confidence in providing care" and "personal growth through experience as a caregiver." From these results, male caregivers' identity was defined as follows: accepting the responsibilities for care and housework as their own roles, which was previously considered a female role, and achieving personal growth by being actively engaged in care and maintaining a good balance between private life and care.

Key words : male caregiver, identity, concept analysis

キーワード : 男性介護者, アイデンティティ, 概念分析

1. 目的

我が国の平成27年の高齢化率は26.7%となった。第一次ベビーブーム世代が前期高齢者に到達し、今後さらなる高齢者の増加、とりわけ後期高齢者の増

加が予測される。そして、高齢化が進むとともに、介護を要する高齢者も増え続けている。そして、高齢者介護は、平成12年に介護保険制度が導入されたが、依然として家族に大きく依存している。

これまで家族の中で介護に関わるのは、ほとんど

吉備国際大学保健医療福祉学部
 〒716-8508 岡山県高梁市伊賀町 8
Kibi International University
 8, Iga-machi, Takahashi, Okayama, Japan (716-8508)

* 岡山大学大学院保健学研究科
 〒700-8558 岡山県岡山市北区鹿田町 2-5-1
Graduate School of Health Sciences, Okayama University
 2-5-1, Shikata-cho, Kita-ku, Okayama, Japan (700-8558)

が女性であった。現在に至ってもその傾向に変化はない。しかし、夫婦のみの世帯やひとり親と未婚の子からなる世帯の増加などに伴い、男性介護者は徐々に増え、平成13年は介護者の23.6%であったが、平成25年には介護者の31.3%を男性介護者が占めている¹⁾。今後、妻を介護する夫や要介護状態となった親の介護を担う息子といった男性介護者のさらなる増加が予測される。

男性介護者の特徴として、孤立していることが多いこと、泣き言や愚痴を言うことに抵抗感を持っていることが多いこと、身内の者に頼らず一人で介護に専念している傾向がみられること^{2) 3)}などが報告されている。男性介護者は熱心に介護に取り組む人が多い一方で、女性介護者に比べ介護疲れの結果から、虐待・傷害事件の加害者となることが多い^{4) 5)}。平成26年度高齢者虐待対応状況結果概要によると、被虐待高齢者からみた虐待者の続柄は、息子が40.3%、夫が19.6%であり、虐待者の6割近くを男性が占めている⁶⁾。また、春日は「介護は女の役割」といった考えのもと、予期もせず介護を担うことになった男性介護者の苦悩は困難へとつながっていくと述べている⁷⁾。

男性介護者は、介護に対して高い価値を抱き、介護を生き甲斐と受け止める傾向がある⁸⁾とされる一方で、先に述べたように虐待者となる可能性も大きい。介護者という新たな役割を男性が引き受けていくためには、自らのアイデンティティの再構築が必要であると考えられる。岡本は、成人期のアイデンティティについて、個としてのアイデンティティ（「自分は何者であるか」「自分は何になるのか」）と関係性にもとづくアイデンティティ（「自分は誰のために存在するのか」「自分は他者の役に立つのか」）という2つの軸で捉えられることを示しており、介護者が被介護者と深い関係性を持つことが、介護者自身の成長・発達感を促すことを示唆している⁹⁾。

そこで本研究では、在宅で実際に介護している男

性介護者のアイデンティティという概念がどのように捉えられているのかを明らかにし、介護を担うことになった男性が、男性介護者としてのアイデンティティを確立するための支援を検討するうえでの基礎資料とすることを目的とする。

2. 用語の定義

男性介護者のアイデンティティ：エリクソンは、アイデンティティという言葉について、自分自身の中で永続する斉一性という意味と、ある種の本質的な特性を他者と永続的に共有するという両方の意味を含んでおり、その相互関係を表している¹⁰⁾。それは、どのような場、時においても、他の誰でもない自分を認知しており、それが他者からも認められているということであろう。

従って、この論文における男性介護者のアイデンティティとは、男性が介護者たる自分を認知し、それを他者からも認められていく過程であると定義する。

3. 方法

(1) 分析方法

Rodgersの手法を参考に、「在宅で介護する男性介護者のアイデンティティ」概念について分析を実施した。Rodgersは、概念は開発されるものであり、時間の流れの中で使用され、適用され、再評価され、洗練されると考え、これは革新的な視点とも言われている^{11) 12)}。「在宅で介護する男性介護者のアイデンティティ」は時代によって変化するものと考えられ、Rodgersの手法が適していると考えた。

(2) 文献の検索方法

「医学中央雑誌Web版」を用い「男性介護者」「アイデンティティ」で検索したところ、検索された文

献は7件であった。そこで、「男性介護者」をキーワードに原著論文を検索したところ、検索されたすべての文献は、先に検索した7件のうちの2件を含む57件であった。また、「CiNii Article」を用い、「男性介護者」をキーワードに検索したところ、検索されたすべての文献は90件であった。重複しているものを除いたすべての文献を検討し、また検索されたものが引用している文献も参考にし、計10件を分析の対象とした。

(3) データ分析

データの分析はRodgersの手法¹³⁾を参考に、文献の内容から概念の持つ特性（属性）、概念に先立ち生じるもの（先行要件）、その概念の結果として生じるもの（帰結）について抽出し、カテゴリー化した。その結果から、本概念の定義を構築した。

4. 結果

在宅で介護する男性介護者のアイデンティティの構成概念として、1つの先行要件、4つの属性、2つの帰結が抽出された（表1～3）。以下、本文中のカテゴリーを【 】, サブカテゴリーを[]で示した。

(1) 概念の属性（表1）

在宅で介護する男性介護者のアイデンティティの属性について、【介護と家事の両立】【介護と仕事の両立】【介護に関するすべての責任を引き受ける】【介護と自分の生活のバランスの保持】が抽出された。

1) 【介護と家事の両立】

男性介護者の多くは、介護と同時に女性の仕事と考えていた家事を担うことに直面し、特に食生活を維持することに困難を感じる¹⁴⁾。しかし、家事についても被介護者から教わったり、公的サービスを利用したりしながら、[自分がやらなければならない

こと]と責任を感じて行っている¹⁴⁾。また、家事の経験がないまま介護も引き受けなければならない生活を、[介護することも家事をすることも普通のこと]だとする感覚で受け入れている¹⁸⁾。

2) 【介護と仕事の両立】

働きながら介護を担うケースは、高齢化の進行や雇用期間の延長などに伴い、増加することが予想される。特に、男性にとって仕事を失うことは経済的な理由だけでなく、[社会とのつながり]を喪失すると考えられる。就業は自らの社会的地位とアイデンティティの中核として位置づけられていることが推察できる¹⁵⁾。また、男性介護者の多くは、働くことが経済的資源というだけでなく、自身の生活・人生の保障という観点からも重要だと感じている¹⁶⁾。働くことは、収入を得るというだけでなく、[自らのQOLの保持]にとっても重要であると考えられる。

3) 【介護に関するすべての責任を引き受ける】

男性介護者は、困難な状況にあってもすべて自分の考え・やり方で介護を行っている。

介護に関して専門職と友好的な関係は維持しつつも、日常的な介護においては自分で工夫し、方法を見つけている¹⁴⁾。周囲に意見を求めながらも、最後の決断は自分で下している²⁰⁾。男性介護者は、自分が[介護をマネジメントしているという自負]を持ち、被介護者にも自分の介護方法を納得させる（容認させる）ことで、介護役割を引き受けている²³⁾。また、家長として、介護の決定権を行使でき、[何事も自分で決め実行する]ことで介護を可能にしてきたと考えられる¹⁷⁾。

4) 【介護と自分の生活のバランスの保持】

男性介護者は、[専門職に対する支援役割期待]を持ち関係性をうまく維持することや、[インフォーマルな支援を得る]ことで、介護を継続することができ、介護と自分の生活を成り立たせている。

サービスの質を見極め、求めるタイミングを逃さないことや、専門職に対し自分の考えを伝え、疑

問を解決したり改善したりする交渉力を持っている²²⁾。また、近隣の理解や協力を得たり、似たような状況にある介護者からの情緒的な支援を得たりすることで、介護継続への見通しを持つことができる¹⁸⁾。

表1 属性

カテゴリー	サブカテゴリー	内 容	文 献
介護と家事の両立	自分がやらなければならないこと	教わったり、公的サービスを利用しなくても自分がやる	新館 (2014)
	介護することも家事をすることも普通のこと	介護も家事もする生活は当たり前のこととして捉える	小林 (2005)
介護と仕事の両立	社会とのつながり	仕事をすることで社会的地位を維持する	松井 (2014)
	自らのQOLの保持	自身の生活・人生の保障	斎藤 (2011)
介護に関するすべての責任を引き受ける	介護をマネジメントしているという自負	周囲に意見を求めても最終的決断は自分です	新館 (2014) 國友ら (2008) 林 (2003)
	何事も自分で決め実行する	介護の決定権を行使し、納得させる	上城ら (2009)
介護と自分の生活のバランスの保持	専門職に対する支援役割期待	サービスの質を見極め、求めるタイミングを逃さない	中村ら (2011)
	インフォーマルな支援を得る	近隣の理解や協力を得る	小林 (2005)

(2) 先行要件 (表2)

在宅で介護する男性介護者のアイデンティティの先行要件として、【介護するのは自分しかいない】が抽出された。

もともと被介護者に肯定的な感情を持ち、家族として (夫だから、長男だから)、[当たり前のこと]として介護を引き受けている男性介護者がいる^{17) 19) 20)}。いまは介護を優先する時期と考え、年

齢とともに起こりうる自然の流れとありのままに受け入れている²²⁾。そして、社会規範による夫や息子としての[被介護者に対する責任感]から介護を引き受けている^{14) 17) 19)}。また、施設に対する否定的なイメージや、入所させると被介護者がかわいそうという思いから在宅介護を選択している場合もある^{16) 18) 19)}。

表2 先行要件

カテゴリー	サブカテゴリー	内 容	文 献
介護するのは自分しかいない	当たり前のこと	家族 (夫として、息子として) 介護するのは当然のこと	上城ら (2009) 長澤ら (2008) 國友ら (2008) 中村ら (2011)
	被介護者に対する責任感	社会規範による夫や息子としての責任を負う	新館 (2014) 上城ら (2009) 長澤ら (2008)

(3) 帰結 (表3)

在宅で介護する男性介護者のアイデンティティの帰結には、【介護への自信】【介護体験からの自己の成長】が抽出された。

1) 【介護への自信】

男性介護者自らが模索し、工夫しながら行ってきた介護によって、[被介護者の体調や病状の安定]が得られていると確信することで、自己の行った介

護に自信が持てるようになってきている。また、それが介護を継続できる見通しにつながっている。

〔被介護者の体調や病状の安定〕は自己の行った介護の成果であり、そのことが在宅介護を続けられる見通しにつながっている¹⁹⁾。被介護者の病状が安定しているという状態は、自分流の介護方法の妥当性の証明であり、男性介護者にとって誇れる状態である²³⁾。それが、〔自己流介護の成功の確信〕につながっている。

2) 【介護体験からの自己の成長】

男性介護者は介護の経過において、介護や被介護者に対する葛藤や負の感情を持ちながらも、現状を

受け入れられたことで、自分なりに介護体験に意味を見出している。

被介護者への理解を深め、現実を見つめることで自らの介護体験を受け入れ、周囲の人に少しでも役に立ちたいという〔他者への貢献〕への思いを強くしている²¹⁾。また、介護体験を通して、女性の役割の大切さや大変さに気付くことにより、被介護者への感謝の思いを抱くようになってきている²⁰⁾。自分が振り分けていた〔性の社会的役割意識の変化〕という体験をすることが、自らの人間的な成長へとつながっていると感じている²²⁾。

表3 帰結

カテゴリー	サブカテゴリー	内 容	文 献
介護への自信	被介護者の体調や病状の安定	自ら行った介護により被介護者が安定していると確信する	長澤ら (2008)
	自己流介護の成功の確信	被介護者の状態の安定は自分流の介護方法の妥当性の証明である	林 (2003)
介護体験からの自己の成長	他者への貢献	介護体験を通して、周囲の人に役立ちたいと感じる	松本 (2014)
	性の社会的役割意識の変化	女性の役割の大切さや大変さに気付く	國友ら (2008) 中村ら (2011)

(4) 関連する概念

アイデンティティに関連した概念として、自己概念がある。自己概念とは、内面世界に属す、他の人が直接的にうかがい知ることのできない自分自身に対して現にいだく意識（自己意識）を暗黙のうちに支えているもの²⁴⁾であるとされる。

(5) モデルケース

Aさん(59歳)は、5年前くも膜下出血の後遺症のため介護が必要となった妻(56歳)を、自宅で介護している。いずれは自分が妻に介護してもらおうものと思っていたが、若くして妻が病に倒れ寝たきりとなってしまう、悩みや不安も大きかったが、自分が看るしかないと心に決め、在宅での介護を始める

ことにした。定年までには期間もあり、まだまだ働きたいという思いもあったし、高校生の娘もいたため、仕事を辞めずに介護しようと考えた。

平日は仕事に行くため、同居している母親(83歳)や時には娘の支援も受けながら、それまで妻任せにしていた家事も担い、妻の介護をしながらの生活を続けている。介護することも家事をすることも、自分ができることやすべきことは自分で工夫し取り組んでいるが、思い切って家族の支援を受けることや、専門家に依頼することはまかせてしまうことで、妻の体調も安定し、自分も落ち着いて生活ができていると感じている。

妻の介護を始めたことにより、介護や家事は女性がするものと思っていた自分の考えも少しずつ変化

し、妻への感謝の思いが持てるようになった。これからは、自らの体験を同じように妻を介護している男性に語ることで、介護することの喜びや辛さを分かち合いたいと考えている。

5. 考察

(1) 「在宅で介護する男性介護者のアイデンティティ」の定義

概念分析の結果から、在宅で介護する男性介護者のアイデンティティとは、「女性の役割と考えていた介護と家事を自分の役割として受け入れ、自らの生活と介護のバランスを保持しながら、介護に主体的に取り組むことにより、自己への成長へとつなげることであり」と定義する。

先行要件には、「介護するのは自分しかない」が抽出された。男性介護者が妻の介護を担うことを決意した要因として、夫婦の愛情を基に、介護を新たな勤めとして責任感を持って受け入れていることが明らかとなっている²⁵⁾²⁶⁾。このような男性介護者がいる一方で、備えのないまま介護場面に投入され、戸惑いながらも家族的責任を果たそうとしている男性介護者も存在する²⁷⁾。夫の立場であっても、息子の立場であっても、女性（妻、母親）に生活面のほとんどを支えてもらっている場合は介護と家事の両方を担わなければならないため、新たな生活に適応することに困難が生じると考えられる。

介護を始めた男性介護者は介護体験に意味づけをしようとする。介護に対し肯定的に考え、意味あるものとして介護体験を受け入れようとしている。そして、介護に関するすべての責任を引き受け、自らが主体となって、介護を進めていこうとしている。介護を経験し、その経過の中で、新たな役割として介護を引き受け、結果から自信を持ち、自らの成長を感じることで、男性介護者として、アイデンティティの再構築が行われていると考えられる。

(2) 「在宅で介護する男性介護者のアイデンティティ」の概念をケア実践および研究活動に適用することの可能性

概念分析の結果から実践への示唆として、男性介護者が介護役割をどのようにして受け入れ、自らのアイデンティティを再構築したかを理解したうえで支援することの必要性がある。硬い意思で気構えて介護役割を引き受ける人、こんなはずではなかったと戸惑いながらも介護する人、いずれもが男性介護者の典型²⁸⁾なのである。消極的な意思から介護を始めた場合でも、介護経験を通して、自己の成長を感じている。しかし、男性は、仕事を中心とする人間関係とアイデンティティを形成する傾向にある²⁹⁾とされており、地域におけるネットワークの乏しさから、ひとり介護を抱え込んでしまうこともあると考えられるため、そのような男性介護者が地域において潜在化しないような働きかけが必要となる。地域社会に存在する互助、共助、公助に関わる組織やサービスと関係性を構築するためには、男性介護者の能動的な関わりが必須条件であるが、誰しものが円滑に取り組めるわけではない³⁰⁾との指摘がある。男性介護者が孤立状態に陥らないためには、どのような支援が必要かを考えていく必要がある。公的サービス、例えば介護保険サービス利用にどのようなつなげていくかなど個別的な支援を考えるとともに、地域の互助につなげていけるような支援も必要ではないだろうか。

今後、さらに男性介護者は増加すると考えられるが、男性介護者には夫、有配偶の息子、単身の息子などが存在する。介護の際の困難、世間の評価、支援者の関わり方は異なる面があるとされている⁷⁾。男性介護者とひとくくりにはできない、新たな概念として開発される必要性も考えられる。

6. 結論

概念分析により、男性介護者のアイデンティティとは、「女性の役割と考えていた介護と家事を自分の役割として受け入れ、自らの生活と介護の balan

スを保持しながら、介護に主体的に取り組むことにより、自己の成長へとつなげることである」と定義した。男性介護者支援において、有用な概念であると考えられる。

(引用・参考文献)

- 1) 厚生労働省 平成25年国民生活基礎調査の概況
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa13/> (last accessed 2015/08/09)
- 2) 奥山則子：性別役割からみた高齢男性介護者の介護，地域保健，28(1)，62-74，1997.
- 3) 奥山則子：文献から見た在宅での男性介護者の介護，東京都立医療技術短期大学紀要，(10)，267-272，1997.
- 4) 湯原悦子：男性介護者による高齢者虐待 先行研究の到達点，高齢者虐待防止研究，6(1)，8-12，2010.
- 5) 上田照子他：要介護高齢者の息子による虐待の要因と多発の背景，厚生指標，56(6)，19-26，2009.
- 6) 厚生労働省 平成26年度高齢者虐待対応状況調査結果概要
<http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-12304500-Roukenkyoku-Ninchishougyakutaiboushitaisakusuis-hinshitsu/0000111665.pdf> (last accessed 2016/08/16)
- 7) 春日キスヨ：介護と男性—介護をめぐる家族の変化と男性介護者の困難，女も男も，118，79-92，2011.
- 8) 一瀬貴子：在宅痴呆症高齢者に対する老老介護の実態とその問題—高齢男性介護者の介護実態に着目して—，家政学研究，48(1)，28-37，2001.
- 9) 岡本祐子：ケアすることによるアイデンティティ発達に関する研究 I—高齢者介護による成長・発達感とその関連要因の分析—，広島大学教育学部紀要第二部，46，111-117，1997.
- 10) エリク・H・エリクソン，西平直・中島由恵訳：アイデンティティとライフサイクル，誠信書房，2011.
- 11) 上村朋子，本田多美枝：概念分析の手法についての検討—概念分析の主な手法とその背景—，日本赤十字九州国際大学intramural research report，3，194-207，2005.
- 12) 谷口好美，柴田秀子：看護現象に迫ろう！「悲嘆」の概念分析①—Rodgersの概念分析を使って，ナーシング・トゥデイ，17(11)，2002.
- 13) Rodgers, B. L., Knafl, K. A.: Concept Development in Nursing: Foundations, Techniques, and Applications. 2nd ed., 77-102, Philadelphia: Saunders, 2000.
- 14) 新館良雄：男性介護者の介護生活の実態と課題，社会福祉士，21，24-32，2014.
- 15) 松井由香：男性介護者の語りにみる「男性ゆえの困難」—セルフヘルプ・グループに集う夫・息子介護者の事例から—，家族研究年報，39，55-74，2014.
- 16) 斎藤真緒：男性介護者の介護実態と支援の課題—男性介護ネット第1回会員調査から—，立命館産業社会論集，47(3)，111-126，2011.
- 17) 上城憲司他：重度認知症の妻を在宅介護する夫の思いの分析，精神科治療学，24(3)，353-362，2009.
- 18) 小林陽子：痴呆症の妻を介護する高齢男性の介護認識とその影響要因，老年看護学，9(2)，64-76，2005.
- 19) 長澤久美子，飯田澄美子：男性介護者の介護継続要因，家族看護学研究，14(1)，58-67，2008.
- 20) 國友香奈他：男性介護者の在宅介護継続の基盤となる価値観，家族看護，6(1)，117-126，2008.
- 21) 松本京子他：認知症高齢者を介護する男性配偶者の介護の思いの様相，日本看護福祉学会誌，19(2)，155-167，2014.
- 22) 中村もとゑ他：認知症高齢者を在宅で介護する向老期・老年期にある男性介護者のよりよく生きる力とそれを

育む要因, 老年看護学, 16(1), 104-110, 2010.

- 23) 林葉子: 有配偶男性介護者による介護役割受け入れのプロセス—グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて—, 家族研究年報, 28, 38-50, 2003.
- 24) 梶田叡一: 自己意識の心理学, 東京大学出版会, 1988.
- 25) 阿南みと子: 男性家族介護者がALS患者の在宅介護を受容する要因—5事例の面接調査—, 日本難病看護学会誌, 6(2), 157-161, 2002.
- 26) 木村麻紀他: 高齢の夫が在宅で妻の介護を継続する要因, 吉備国際大学研究紀要(医療・自然科学系), (22), 15-25, 2012.
- 27) 津止正敏: 男性介護者への包括的支援の論理と根拠—暮らしと介護, 仕事と介護の視点から—, 社会福祉研究, (122), 47-56, 2015.
- 28) 津止正敏: 男性介護者の仕事と介護を巡る実態と論点—介護者モデルの変容と新しい生き方モデル—, 生活経済政策, (223), 12-17, 2015.
- 29) 斎藤真緒: 男性介護者調査研究から見えてきたこと—家族介護支援とのかかわりを中心に—, 認知症ケア最前線, (24), 23-29, 2010.
- 30) 工藤雄行他: 在宅認知症者に対する男性家族介護者支援の方向性—フォーマル, インフォーマルサポートの側面からの検討, 弘前医療福祉大学短期大学部紀要, 4(1), 43-54, 2016.